

「新しい歩みに向けて」

マルコによる福音書 11章15～19節

女子聖学院中学校高等学校チャプレン 高橋 恵一郎

我が家での私の役割は妻に対しては夫であり、子供たちにとっては親です。妻の分量とは比べ物にはなりません、料理、買い物、家事もします。壊れたものの修理や解体、外部業者・学校・施設等の方々との折衝も私の担当です。

しかし、そうしたことは別に家族から期待されていることがあります。それは気持ちの悪いものの処理です。流しや風呂場の流し口、洗濯機の下のどろどろしたもの、あるいは、しばらくして発見された腐敗物、家屋内外に出現する虫たち。そうしたものに家族が遭遇すると、まず悲鳴が聞こえ、必ず「お父さん呼んできて」という言葉が続きます。

今年の夏は小蠅が異常発生しました。いくら対応しても減りません。そんななか発生源が特定されました。卵と赤ちゃんがたくさんいました。私だって気持ちが悪くものは好きではありません。しかし、そういう時はいちいち見つめてはいけません。気合をいれ、一気に処理をします。

さて、本日の聖書では、イエス様が大暴れしています。当局側からすればイエス様は狼藉者と見えたことでしょう。しかも場所は神殿の境内でした。

そこで売り買いされていたものは野菜や肉、生活用品ではありません。もちろん娯楽や、闇の世界のものなどではありません。そこは神様のための宗教用品の市場でした。神様に捧げるものは完全なものでなければなりません。お捧げするための特別な貨幣、検査済みの鳩や羊が売買されていたのです。当然、手数料がそれなりにかかっています。

問題はその収益です。もし、貧しい人々に還元され、用いられるのであれば素晴らしいことでありました。しかし、実際は、その収益は相当の割合で祭司長らの収益となっていたのです。神殿にはイスラエルのあらゆる人たちが集まってきます。従って、神殿市場の収益はおそらく相当のものであっただろうと思われれます。

当時、貧しい人々は毎日毎日を食うや食わずで過ごしていました。一般の人々は、ローマの兵隊の圧政に怯え、借金の取り立て人に生活を脅かされ、病があっても医者に見てもらうことができず、弱って命を落としていく家族がいても何もしてあげられない、そのような日々を過ごしていたのです。

そのような人々を救うどころか、むしろ神さまの名を使い、収奪をしている。それは主イエスの目から見れば、欲望の虫がうじゃうじゃとわいているような、汚らわしいところとして、その目に映ったのではないかと思うのです。しかも、そこは神の宮です。神の子である主イエスにとってはお父さんの家です。それゆえに、主イエスは神殿の境内で商人たちを追い出したのです。ここにくるな、たかるな、と両替人の台や鳩や腰掛けをひっくり返されたのではないかと思うのです。その行いの根源にあるの

は、父なる神様への子としての思いでした。

当局の人たちは当然、怒りました。しかし、主イエス様は気にされません。イエス様が大切にされたことは、神の前に苦しむ人、悩む人と共にあること、共に進むこと、そして父なる神様の愛の懷に「ただいま～」と連れ戻ることでした。神殿がまさにみんなの家になることでした。

ところで、ここまで話すと祭司長らがとんでもない人たちに見えるかもしれませんが、そこで思いを止めてはいけないと思います。果たして、私たち自分自身はどうでしょう。私たちの心・行動には罪はないでしょうか。私たちの心のうちには悪いものの巣が存在していないでしょうか。振り返ってみる必要があります。ずるい思い、悪い癖、人への悪意、妬み、怠惰・・・気がついたら、神様にごめんなさい、あなたに喜ばれる生き方、みんなを幸せにする生き方ができるように導いてください、と祈ってほしいと思うのです。神様は素晴らしい知恵と力、気づきや出会を備えてくださるお方です。祈りの時こそ、私たちに与えられた神殿です。神様にただいま～と語りかけ、そこから新しい歩みを始めようではありませんか。

夏休みが終わり、秋の生活が始まりました。まず、神様に心を向けて、そして共に過ごしていきましょう。

お祈りします。神様、どうか私たちの心のうちに悪いものがあれば気づきを与えてください。悪いものの巣を、取り除いてください。そうする決意を与えてください。真っ直ぐな心で、恵みと収穫の秋の時を過ごせますように。主イエス・キリストのみ名によってお祈りいたします。アーメン。

2022年9月1日 女子聖学院中学校高等学校 放送礼拝